

創業 100 周年を迎えて — 技術に求めたロマンの成果 —

Kawada's Centennial Awakening
- Romanticism Complements Innovation -

川田テクノロジーズ株式会社
Senior Adviser
KAWADA Technologies, inc.

相談役

川田 忠樹
KAWADA Tadaki



大正 11 年（西暦 1922 年）に川田鐵工所が創業した時には、まだダム工事現場の下請に過ぎず、その後昭和 31 年（西暦 1928 年）に、富山県西部の田舎町、福野の駅前に居を構えた時にも、わずか 2～3 人の子方（こかた）が居るばかりで、創業者川田忠太郎の妻「いと」が鞆（ふいご）を吹いていた。そのようなところが、その後創業 100 周年を祝えるまでの企業に成長しようとは、いったい誰が想像し得たであろうか。

それでも、昭和 6 年（西暦 1931 年）に満州事変、昭和 12 年（西暦 1937 年）に日中戦争、そしてついに昭和 16 年（西暦 1941 年）には太平洋戦争までが始まると、忠太郎の鍛冶屋としての腕前は軍関係者の知るところとなり、日本軍の指定工場として認定されて、鍛造物の仕事が増えていった。

福野町のあたりは富山県でも緑豊かな米作地帯で、そこに働く若者達も、軍の指定工場なら兵役にはとられまいとの入社希望者もあったという。

二代目川田忠雄は、それまで大阪の帝国鑄工所で設計課長として、日本の釜石や旧満州の鞍山で、製鋼所のプラント造りとその合理化に従事してきた。

それが丁度この頃、日本も沿海部にばかり造船所を集中しては危ない、海を離れて製作できるものは離れて造れという意見が出始め、それを知った忠雄は、早速名乗りをあげた。

戦時中といえども、国内の生産力を落とさぬために必要となる指導者としての高級技術者は不可欠で、忠雄はそうした技術者の 1 人として登録され、兵役が免除されていた。沿海部を離れて内作部品を、富山県の最西端で、石川県に隣接する倶利伽羅（くりから）峠のふもと、石動（いするぎ）の町に設けようとしていた佐賀造船所は渡りに船と、早速、忠雄を実質的には技術の総責任者である、製造課長として迎え入れた。昭和 19 年（西暦

1944 年）4 月、忠雄 33 歳の時のことであった。

だが、忠雄の佐賀造船勤務は、僅か 1 年ちょっとのことであった。翌昭和 20 年（西暦 1945 年）の 8 月 6 日には広島に、そしてその 3 日後の 8 月 9 日には長崎に、世界で初めての原子爆弾が投下され、ついに 8 月 15 日の正午には、昭和天皇による玉音放送でポツダム宣言受諾の「終戦の詔勅」が出された。

終戦と同時に石動の佐賀造船は解散となり、忠雄は福野に戻って初代忠太郎と一緒に仕事をするようになったが、今度は日本の国鉄（当時）が忠雄を囑託として、週に 1～2 度講義をさせた。戦時中は軍が最優先で、荒廃にまかせた国鉄の技術・車輛・設備などの再建のためであった。

よかったことはその時忠雄の教えを受けた鉄道の技術者達が、囑託料だけでは申し訳ないと、いろいろな仕事を世話してくれたことであった。お陰で当時、「砺波税務署管内では、今年も我が社の納税額が一番でしたよ」と、父忠雄が夕食のうちに、祖父の忠太郎に、嬉しそうに報告をしていたのを私は覚えている。

その後も順調に業績を伸ばすことができ、昭和 57 年（西暦 1982 年）の創業 60 周年を記念して、社史を作ろうという話になり、経済誌「ダイヤモンド」の岩井正和氏が担当してくれることになった。

ところが岩井氏は取材を続けていくうちに、「川田さん、お宅の会社は実に面白い。これは社史なんかにして、できた時はよいがその後は誰も読まないような物にするのはもったいない。私にまかせて、ダイヤモンド社から出版させてくれ」と言われるようになった。「『暖流経営』と言う、御社の思想が気に入った」と。

このようなやり取りがあって、「川田工業躍進の経営戦略」という副題が付いて、岩井正和著として世に出た

ものは、時代もよかったのか、版を重ねて随分と売れた。「本屋にないぞ、1冊よこせ」と私も友人や先輩の諸氏から何度か言われて、手元にある本を贈呈し、また出版元から取り寄せたのを覚えている。

話は少し遡るが、昭和52年（西暦1977年）、父忠雄が病で倒れ、再起不能とわかって42歳とまだ若い私が、急きょ跡を継いで三代目の社長になった。その最初の仕事は、「川田技報」（年刊）の出版であり、最初の年の巻頭言として書いたのが「技術を夢とロマンのあるものにして、無味乾燥な物にだけはするな」であった。

我が社の優秀な社員達は、私の意のあるところを十二分に汲んでくれて、技術にロマンの花を咲かせてくれた。何しろそれ以降の40年の間に、技報を舞台にしながら、40人以上ものドクター（博士）を産み出し、中には出身大学などから請われて、大学教授となった人も、10人近くはいる筈である。

ロマンの花は、我が社の経営面でも見事に花開いた。創業60周年の時、著者の岩井正和氏は、家内工業として始まった野鍛冶が、60年間で年商300億円を稼ぐ企業になったと絶賛してくれたのだが、実は我が社の成長はそれから後の方が大きくて、付図-1を見ていただければ判るように、約40年後の100周年を迎える目前には、

グループ全体で1,270億円にも達するのである。

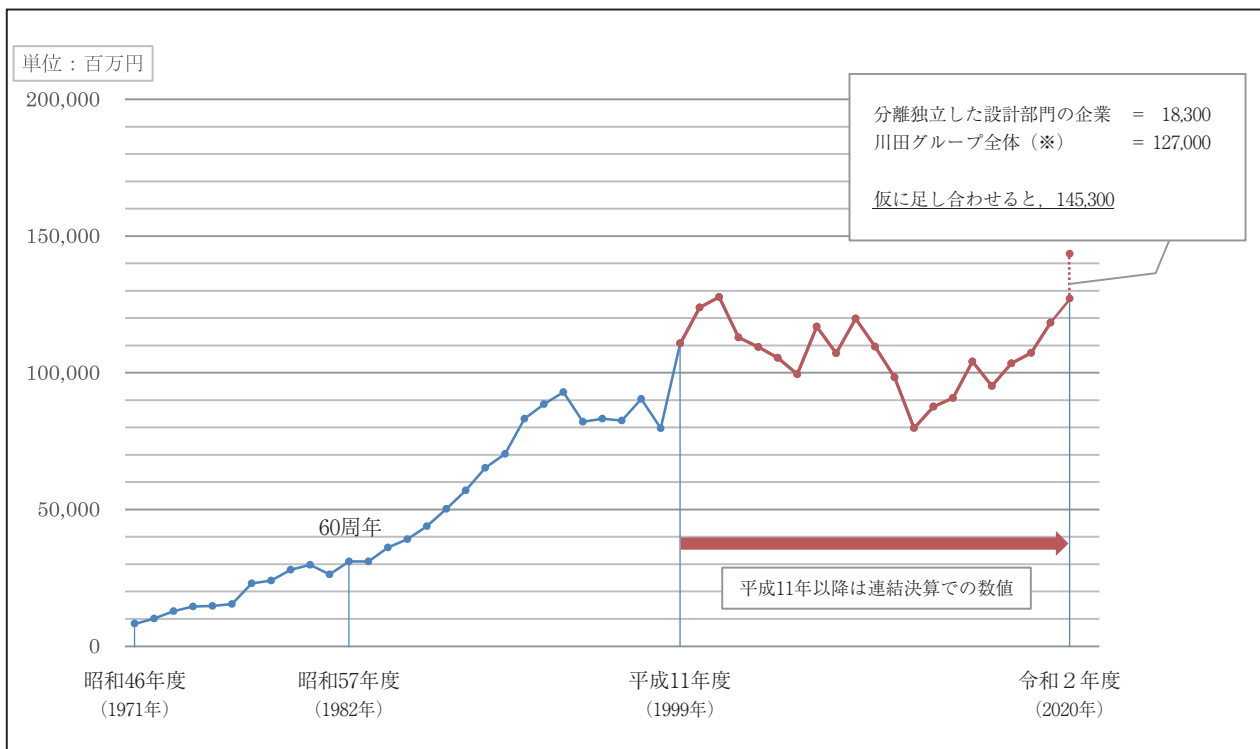
蛇足ながら、60周年当時は川田工業の中にあった設計部門が、現在は分離独立しているのので、令和2年度（西暦2020年度）のこのグラフには入っていない。もし平仄（ひょうそく）を合わせる意味で同社の直近の数字を加えることにすれば、さらに約183億円の売上げが上乗せされ、年商はおよそ1,450億円、社員総数も3,400人あまりということになる。

40年以上前に、我が社でも技報を出そうということになって、その最初の号に社長として巻頭言を求められた時、私は迷うことなく「技術にロマンを」と題して

- 技報をロマンと技術の融合の場としよう
- 技術的ロマン探求の場として技報を育てよう

と書いた。

あれから40有余年、技報も、会社も、人材も、立派に育って、その成果を挙げて呉れたようで、誠に嬉しい限りである。



付図-1 川田グループ売上高推移

※平成10年度（1998年度）までは川田工業単体、平成11年度（1999年度）からは川田グループ連結決算での数値